

16世紀地中海地方における 人口成長と穀物危機

永 沼 博 道

は じ め に

16世紀のヨーロッパは安定した人口成長と都市への人口集中によって特徴づけられる。これは17世紀が全体として人口減少もしくは停滞を経験したのとは著しい対照を示している。16世紀はなお経済的膨張の時代であった。地中海世界は繁栄を維持しており、17世紀初頭まで北部・中部イタリアはヨーロッパの最も進んだ工業地帯であり、高い生活水準を享受した地域であった。地中海の東部ではオスマン・トルコがその全盛期をむかえ、その首都イスタンブールは政治・軍事の中心地としてのみならず、商工業の中心地として急速に巨大都市への変貌しつつあった。都市への人口集中は食糧の調達問題を都市行政の中心課題とした。都市はいかに安定した食糧供給源を確保するかに腐心した。16世紀においても飢きんや疫病は都市を脅し続けていたからである。主食たる穀物の補給は大消費地たる都市にとってとりわけ重要であった。しかし高い輸送費や伝統的な技術にもとづく収穫の不安定性はしばしば都市を危機に陥らせていた。ここではヴェネツィアとイスタンブールにおける小麦の調達に関する諸問題に焦点をあてつつ、16世紀の地中海地方における都市と食糧問題について若干の考察を行ってみたい。

人 口 成 長

16世紀の経過中に地中海世界は、前後の世紀に比べるならば一きわ高い人口成長を経験した。F. Braudel の推計によれば、1500年から1600年の間に3,000万ないし3,500万から6,000万ないし7,000万へと増大した。⁽¹⁾カスティーリャでは1530年の300万から1591年には600万へと倍増している。シチリアにおいても1501年の600万から1607年の1,100万へ急増している。オスマン・トルコでは1520—1530年の1,200万ないし1,300万から1600年には3,000万ない

表1 16世紀シチリアの人口

年	シチリア全島〔I〕	パレルモ〔II〕	メッシナ〔III〕
1501	600,000	50,000	35,000
1548	850,000	80,000	50,000
1570	1,000,000	90,000	75,000
1598	1,100,000	104,000	100,000

〔I〕については F. Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen*, p. 371, 〔II〕および〔III〕については F. Mauro, *Le XVI^e siècle européen*, p. 161.

図1 16世紀～17世紀前ヴェネツィアの人口



B. Pullan, "Wage-Earners and the Venetian Economy", p. 150 より作成。

(1) F. Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, (2nd ed.), Paris, 1966, tome 1, p. 368.

し3,500万になった。都市の人口増加もまた著しく、シチリアの主要都市メッシナとパレルモでは1世紀の間にそれぞれ5万から10万4千、3万5千から10万へと増大している。⁽²⁾1500年に15万であったナポリは1599年27万5千となった。⁽³⁾ヴェネツィアの人口も1501年の10万から1575年には17～8万に増加している。⁽⁴⁾

Ö. L. Barkan のオスマン・トルコの人口についての分析の結果は、この地においても16世紀の大半を通じてかなりの人口増加があったことを示している。Barkan はアナトリアの諸地方について1520年—1530年から1570年—1580年の半世紀間に人口増加率が59.9%であったことを提示した。同期間におけるバルカンでは71%、シリアでは55%の増加率であった。⁽⁵⁾

この時期のイスタンブールの人口については十分な情報は得られない。1478年の記録によれば、この時イスタンブールには既婚男子のイスラム教徒9,517人、キリスト教徒5,162人、ユダヤ人1,647人が居住しており、計16,326の戸数となる。これを Barkan の方法に従って計算すれば総人口97,956人となる。1520—1530年についての Barkan の推計では約40万人となり、1570—1580年にこれは70万人になったと見積られている。⁽⁶⁾1550年に Sinon Pasha の待医 Cristobal de Villalon はキリスト教徒戸数4万、ユダヤ人戸数4千、イスラム教徒戸数6万、計10万4千戸で、総人口を41万～52万と見積っている。

(2) 表I参照。16世紀第3四半期より一転減少期に入ることが見てとれる。

(3) Ibid., p. 371

(4) B. Pullan, "Wage-Earners and Venetian Economy 1550-1630", B. Pullan (ed.), *Crisis and Change in the Venetian Economy in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, London, 1968, p. 150 (図1参照)。

(5) Ö. L. Barkan, "Research on the Ottoman Fiscal Surveys", M. Cook (ed.) *Studies in the Economic History of the Middle East*, London, 1970. pp. 169-170.

(6) Barkan は平均家族数を5人と見て、係数5を乗じ、さらに宮廷、兵舎等の人口がイスタンブールの場合20%とみなしてこれを加算する。即ちこの場合は $16,326 \times 5 \times \frac{120}{100} = 97,956$ である。Ö. L. Barkan, "Essai sur les données statistique des registres de recensement dans l'Empire Ottoman au XV^e et XVI^e siècle", *Journal of Economic and Social History of Orient*, Vol. 1, Part I, 1957, pp. 21-35.

る。なおこの場合、イスラム教徒と異教徒の比率は57.7%と42.3%であり、1478年における比率58：11%と41.89%にきわめて近い⁽⁷⁾。よってR. Mantranはイスタンブールにおけるイスラム教徒と異教徒間の比率に大きな変動がなかったものとみなし、カピチュレーションに記載されたキリスト教徒数から逆算して、17世紀末におけるイスタンブールの人口を60万から70万、対岸のウシュクダルを含めて70万から80万と見積っている⁽⁸⁾。Barkanの数字と合わせてみるとイスタンブールの人口は17世紀にはほとんど増加しなかったことになる。17世紀にはオスマン・トルコは衰退期に入り、首都イスタンブールの上昇傾向は止んだものとみられるが、Barkanの推計はそれにしてもやや大きすぎるように思われる。計算の過程で使用した係数に問題があるようである。しかしながらこの誤差を考慮に入れても、この時期イスタンブールの人口が急成長し、西世界最大の都市であったことは否定できない。

農 業 生 産

人口圧力はもともと不安定であった地中海地域の穀物の需給関係を次第に逼迫させることになった。16世紀初頭にカスティールヤにおけるイスラム教徒の追放は、彼等が長い期間維持してきた灌漑施設の荒廃をまねき、耕地を著しく荒廃せしめた⁽⁹⁾。他方 Mesta（牧羊者組合）の特権を強化して羊毛輸出を拡大させようとする政策は、耕地の減少と牧草地への転化を促進した。農業生産はもはや内需をまかなうには不足であった。折からイスパニア領アメリカから大量に流入した貴金属はインフレーションをまねき、穀物価格を1530年代から著しく上昇させた⁽¹⁰⁾。王室が穀物価格の統制によってこれを抑え

(7) R. Mantran, *Istanbul dans la seconde moitié du XVII^e siècle*, Paris, 1962, pp. 44-45.

(8) *Ibid.*, p. 45.

(9) T. Vicence Vives, "The Decline of Spain in the Seventeenth Century", C. Cipolla (ed), *The Economic Decline of Empires*, London, 1970, pp. 133-136.

(10) E. J. Hamilton, *American Treasure and the Price Revolution in Spain (1500-1650)*, Cambridge (Mass.), 1934.

ようとする政策を採ったことは、農民をますます耕作農業から離脱せしめる結果をもたらした。

イタリアにおいては人口の成長が急激に土地の枯渇をまねいた。シチリアでは山岳地帯の森林を焼払って耕地の拡大に努めた。シチリアでは一年に一度小麦を栽培すると翌年は休閑地として地味の回復をはかる二圃制が一般的であった。⁽¹¹⁾このことは同じ土地からは隔年でしか収穫されないことを意味し、一定単位の土地についての低い生産性となって現われる。従って全体的な生産向上の為にはひたすら耕地を拡大することに努め、耕作不適地の耕地化へと結果した。それは同時に自然を破壊し、土地の肥沃度を著しく減退させることとなる。事実シチリアでは17世紀になると農業生産の低下となって現われた。ヴェネツィアではイタリア本土の後背地（テラ・フェルマ⁽¹³⁾）の荒地の開墾や干拓に努めた。それとともに世紀中頃にはトモロコシを導入した。トモロコシは非常に高い生産性をあげたものの他方で土地の肥沃度を急速に低下せしめるマイナス面も持ち合わせていた。米の栽培も試みられたが、それほど大きな規模ではなかったようである。⁽¹³⁾

技術的保守性、資本の不足、革新的精神の欠如は一人当り生産高の停滞となって示され、急速な人口成長に対応し得ないこの農業生産の非弾力性が次第にこれらの地域の経済的困難を深めて行った。けだし農業基盤が弱体であっては一国の経済の長期的安定はないからである。円滑かつ低廉に遠隔地から大量の穀物を輸入することの困難であった当時であっては尚のこと事態は重大であった。

(11) F. Braudel, *op. cit.*, p. 527.

(12) terra ferma, 堅い土地の意、ヴェネツィアはラグーン（潟）の柔らかい土地を埋立てて建設された都市であり、支配下にあるイタリア本土を「堅い土地」と呼んだ。

(13) S. J. Woolf, "Venice and the Terraferma: Problems of the Change from Commercial to Landed Activities", B. Pullan (ed.), *Crisis and Changes in the Venetian Economy in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. p. 178.

この農業危機を一段と強めたのが16世紀における不順な気候であった。⁽¹⁴⁾ 1525年にはアンダルシアがひどい日照りに悩まされた。1528年、1540年にはトスカナ地方の飢きんで、フィレンツェは飢えた農民が流入して来るのを防ぐために市の門を閉じなければならなかった。1575年にはルーマニアで5フィートもの積雪があり、⁽¹⁵⁾ 1583年にはイタリア中を飢きんがおそった。1590年代の長く冷たい多雨気候は地中海世界を北ヨーロッパから大量の穀物を輸入しなければ立ちゆけない状態に陥しいれた。ローマ、フィレンツェ、ジェノヴァ、ヴェネツィアのような大都市の穀物調達はとりわけ深刻であった。1586年の凶作の後この傾向は強まり、1590年—1591年にはその極に達した。トスカナ大公はダンツィヒからの穀物輸入をはかり、1590—91年に最初の大輸送船団がリヴォルノ港に到着した。カスティールヤ、アンダルシア、シチリアといったかつての穀倉地帯も北ヨーロッパからの穀物輸入をあおがねばならない状態とな⁽¹⁶⁾った。

地中海東岸のオスマン・トルコにおいても高まる人口成長は次第に農業生産に危機をもたらしつつあった。M. A. Cook は16世紀のアナトリア地方における人口と耕地の関係についての統計的分析から、16世紀の人口成長が地中海世界に困難をもたらしたとする Braudel の見解に賛意を表明している。⁽¹⁷⁾ アナトリア地方では1475年から1575年の間に人口も耕地面積も共にゆるやかな増加を示しているが人口の増加率の方がより高いものであった。1475年から1470年代までに人口は70%増加したのに対して、耕地面積はわずか30%しか増加していない。しかもこの期間に特に農業技術上の変化は生じていず、さらに牧羊業、果物栽培への転換もなく、むしろ伝統的な穀物生産への強化がみられ⁽¹⁸⁾うる。

(14) E. Le Roy Ladurie, "A Long Agrarian Cycle Languedoc 1500-1700", (translated by J. Day), P. Earle (ed.), *Essays in European Economic History 1500-1800*, 1974. pp.143-164

(15) F. Braudel, *op cit.*, pp.300-301.

(16) *Ibid.*, pp.543-545. p.570.

(17) M. A. Cook, *Population Pressure in Rural Anatolia 1450-1600*, London, 1972.

(18) *Ibid.*, p.17.

都市と穀物補給政策

ヴェネツィアの人口は16世紀後半において平均約15万であり、これに対して小麦の総供給量は45万スタイオであった。従って年一人当り消費量は3スタイオ（249リットル）となる。この消費量はラゲーズにおける一人当り年消費量1.5クペロ（288リットル）にはほぼ等しく、これは当時の地中海諸都市住民の平均的な小麦の消費量であった。⁽¹⁹⁾

ヴェネツィアは従来から、クレタ島、コルフ島等エーゲ海の植民地、イタリア本土、エジプト、マケドニア、トラキア等外部から多量の穀物を輸入して、年々増大する内需にあてていた。さらに、ヴェネツィアの誇るガレー船隊、東地中海各地に拡がる植民地の守備隊の維持の為に大量の穀物を必要とした。戦争の時にはその量は莫大なるものとなった。⁽²⁰⁾ヴェネツィア政府は安定的な供給を確保するために永続的な規制を行った。ヴェネツィアの湾からの穀物の他地域への輸出は禁止された。イタリア本土のヴェネツィア領の穀物は首都に移入することが強制された。ヴェネツィアの穀物局は市に入ってくる穀物を統制するだけでなく、その市内での販売についても規制した。小麦粉はサン・マルコとリアルトの公の販売所で、市の役人（サン・マルコの場合は *Magistrats del Fondaco alla farina*、リアルトについては *Signori al Formento del Rialto*）によって直接販売された。⁽²¹⁾パン焼き職人もまた当局の監督を受け、一個当りの価格は定められていた。⁽²²⁾

しかるに地中海地方の過剰人口はヴェネツィアの従来からの穀物の供給源を枯渇させた。エーゲ海、バルカンは次々にトルコ領になり、トルコは内需

(19) M. Aymard, *Venice, Raguse et le Commerce du Blé pendant la seconde moitié du XVI^e siècle*, Paris, 1966, p. 17.

(20) *Ibid.*, pp. 22-31.

(21) *Ibid.*, p. 74.

(22) *Ibid.*, p. 19.

の拡大によりラグーザを除いて外国への穀物の販売を禁止した⁽²³⁾。シチリアからの輸入は1586年の31.728スタイオ（全移入量の9.89%）と1587年の46.194スタイオ（全移入量の12.78%）から1588年の22スタイオに激減した⁽²⁴⁾。ヴェネツィア政府の急務は十分な食糧を確保することにあつた。首都に穀物を持ち込む船には報償金が出された⁽²⁵⁾。海外供給の不安定性はヴェネツィア政府としてその後背地テュラ・フェルマに供給源を求めさせた。穀物輸出の禁止はテュラ・フェルマまで拡げられた。テュラ・フェルマに土地を保有するヴェネツィア人はその保有地で生産された穀物は全てヴェネツィアに運び込むことが強制された。非ヴェネツィア人には関税の免除によってヴェネツィアに穀物を持ち込むことが奨励された⁽²⁶⁾。

テュラ・フェルマの開墾の時代は既に1540年代に始まっていた。所有地に課せられた土地税（decima）の額は1537年の4万2千デユカートから1566年には9万3千デユカートに急増し、1583年には13万4千デユカートに達した⁽²⁷⁾。インフレーションの影響を考慮しなければならないが、ヴェネツィア人による保有地の増大を示す数字ではある。1588年に Piero Bodoer によれば、ヴェネツィア人はパドヴァ、トレヴィン、ヴィセンツィア、ヴェロナに
 おそらく15万ないし16万ヘクタールの土地を所有していた⁽²⁸⁾。1580年から1630年にこの面積は急増している。

アドリア海沿岸の都市国家ラグーザ（ドブロヴニク）は山岳地帯が海にせま
 って耕地が極度に不足しており、その領地内では年間4ヶ月分しか生産出来
 ず、8ヶ月分は常に外国からの輸入に依存しなければならなかった。ラグー
 ザの古文書館に穀物輸入に関する史料が他の商品に関するものよりも多く存

(23) N. H. Biegan, *The Turco-Ragusan Relationship*, The Hague-Paris. 1967. p. 109

(24) M. Aymand, *op. cit.*, p. 148.

(25) S. J. Woolf, *op. cit.*, p. 182.

(26) *Ibid.*, p. 186.

(27) *Ibid.*, p. 191.

(28) *Ibid.*, p. 192.

在するのは、ラグーザ市がいかに穀物の備蓄に腐心していたかを示すものであろう。⁽²⁹⁾ラグーザへの穀物輸出地としては、エーゲ海沿岸諸地方、バルカン、南イタリアのアブリアとシチリアが挙げられる。バルカンの穀物は以前から西地中海方面までも輸出されていたが、オスマン帝国のバルカン征服以後、ラグーザ以外にバルカンの穀物を輸出することを禁止した。それにトルコ内部において次第に大都市や軍隊の食糧補給のために多量の穀物が必要とされたためである。ラグーザが輸入を認められたのももっぱら国内消費の為であって、これを他のキリスト教諸国（Dar al Harb）へ転売することは禁じられた。⁽³⁰⁾

表II 16世紀オスマン・トルコ主要諸都市人口

都 市 名	1520—1530	1571—1580	成長率 (%)
イスタンブール	400,000	700,000	
アレクサンドリア	56,881	45,331	
ダマスカス	57,326	42,779 (1595)	
ブルサ	34,930	70,686	
エディルネ	22,335	30,140	
アミダ	18,942 (1541)	31,443	
アンゴラ	14,872	29,007	
アテネ	12,633	17,616	
トカット	8,354	13,282	
コニア	6,127	15,356	
シヴァス	5,560	16,846	
サライエヴォ	5,632	23,485	
モナステル	4,647	5,918	
スコピエ	4,631	9,867	
ソフィア	3,899	7,848	

ブルサ以下12都市 計 142,562 271,494 90.4

Ö. L. Barkan, "Essai sur les données statistique", p. 27. より

(29) F. W. Carter, *Dubrovnik (Raguse)*; A classic city-state, London-N. Y., 1972, p. 320. M. Aymard, op. cit., p. 78.

(30) N. H. Biegman, op. cit., p. 34. F. W. Carter, op. cit., 340, F. Braudel, p. 572.

オスマン・トルコにおいては都市はイスタンブールを除くと比較的小規模であった。政治・軍事・商工業の中心地としてのイスタンブールの地位はきわ秀でており、そこで消費される大量の食糧をいかにして補給するかは一つの大きな政治上の課題であった。⁽³¹⁾ イスタンブールには大きな穀物貯蔵庫と軍隊のための補給所があり、大屠殺場では年間400万頭の羊、300万頭の小羊、20万頭の牛が屠殺された。これに宮廷および兵営における消費量を加算した量がイスタンブールの年間の消費量であった。これら畜肉については、⁽³²⁾ゼレップ Celeb（家畜仲買人）によって供給された。⁽³³⁾

穀物については、オスマン・トルコでは原則としてこれを輸出禁止にし、それぞれの地方消費分以外はイスタンブールに輸送するように強制された。トルコ領内における主な穀物生産地は、ブルガリア、テッサロニカ、マケドニア、モルダヴィア及びトラキアの諸地方であった。これらの生産地から集められた小麦はイスタンブール各所の製パン所においてパンに焼かれた。この製パン所はイスタンブールの市壁内に84ヶ所、ガラタとユニコイに25ヶ所、ウシュクダルに14ヶ所、計138ヶ所以上の製パン所で毎日11,700キルの小麦が消費された。これに宮廷、兵営、救護所の分を加算すれば、20,000キルになるものと推定される。⁽³⁴⁾

この多量の小麦を確保するためにオスマン政府は *muhtesib* を通じて間接的に統制するとともに、投機をさけるために最高価格を設定した。オスマン政府は直接・間接に食糧供給を国家の統制のもとに置くことを意図したのであるが、実際に穀物流通を動かしていたのは地方官吏、大商人、穀物取引業者等であった。これら流通担当者によって法的には禁止されていたはずの密輸が横行していた。16世紀中葉からの西地中海地方の穀物危機によって、ト

(31) Ö.L. Barkan, "Essai sur les donée statistique", p. 27. 表II参照。

(32) R. Mantran, op. cit., pp. 194—195.

(33) B. Cvetkova, *Le Celep et leur rôle dans la vie économique des Barkans à l'époque ottomane (XV^e-XV^{III}^e siècle)*, M. A. Cook (ed), *Studies in the Economic History of the Middle East*, London, 1970. pp. 172-192.

(34) R. Mantran, op. cit., p. 181.

ルコの穀物への需要が高まった時には大量の小麦が密輸によって国外に流出した。トルコにとって最高価格制はトルコの小麦の価格をイタリアに比して2分の1もしくは3分の1まで下落させ、この為に密輸は大きな利潤を生むものであった。しかもこの密輸には地方政府が直接関わり合っていた。首都への穀物補給の問題は常に地方政府と中央政府のもめ事の一つであり、また中央政府の権威に関わる問題でもあった。⁽³⁵⁾しかるにこの中央政府の権威はシェレイマンの死後16世紀後半には急速に衰え始めていたのである。

地中海における穀物貿易

穀物は輸送の容易な商品ではあるが、又、非常に嵩の高い商品である。従って香料や絹織物等の奢侈品に比して、はるかに輸送費が問題となる。トスカナではフィレンツェからわずかに13.4マイルの範囲内で、1570年には4.24%、1600年で3.35%の費用がかかった。ヴェネツィアにとって最もきびしい穀物危機がおそった1590年から1591年にかけてポーランドを旅したヴェネツィア人 Marco Ottobon はクラコフからヴェネツィアまでの輸送費を試算しているが、それによると次のようになる。1スタイオの穀物はクラコフで8リラである。クラコフからウィーンまでの輸送費7リラ12ソルド、ウィーンからヴィラッハまで7リラ10ソルド、ヴィラッハからヴェンゾーネまで3リラ、ヴェンゾーネからポルト・グルアロまで1リラ4ソルド、ポルト・グルアロからヴェネツィアまで海上輸送で3ソルドであった。袋や樽の費用を除外しても、この他に途中の関税や手数料を考慮しなければならない。総費用は30リラ19ソルド、およそ31リラである。この行程を輸送すれば価格はほとんど4倍にもなる計算である。従ってこの輸送の実施は不可能であった。⁽³⁶⁾

海上輸送はより安価であった。1584年のイタリアからイスパニアへの輸送の例についてみれば、中部イタリアの内陸に15~25マイル入った購入地か

(35) F. Braudel, op. cit., 537, M. A. Cook, op. cit., p. 32.

(36) F. Braudel, op. cit., p. 523

ら、アリカントもしくはカルタヘナに至る輸送費は1ファネガにつき関税を含めて $15\frac{1}{2}$ レアルであった。内訳は港までの陸上輸送費3レアル、輸出関税5レアル、船賃 $3\frac{1}{2}$ レアル、シーズン遅れのための特別保険料が30マラヴェディである。⁽³⁷⁾小麦の価格はイタリアで10レアル、カスティールでは22レアル3マラヴェディであった。

穀物は地域間の価格差によって遠く数百マイルを送られた。エジプトやエーゲ海地域の穀物がヴァレンシア、ジェノヴァ、ローマに送られた。テッサロニカ、マケドニア、ブルガリアからも西地中海へ送られた。1550年代始めトルコ産穀物の輸入ブームが起きている。⁽³⁸⁾しかるにトルコ政府は1555年穀物輸出禁止令を發布した。西の諸国はイスタンブールのトルコ政府へ穀物の輸出の承認を求めたが、トルコ政府はこれを拒否している。しかし密輸が横行しエーゲ海諸島はその基地になっていた。Cookの指摘するところによれば1570年—1590年の穀物密輸についてのオスマン側の史料は数多く残存し、このことから密輸は決して例外的な事件ではなかった。しかもこの不法な輸出が地方行政官自身の手によって遂行せられたのである。イスタンブールに向けて船積みされた小麦がしばしば途中の海上や港で売り払われた。⁽³⁹⁾

しかしながら1555年以降トルコの市場が公式には閉じられたために、この地から大量の穀物を導入することは困難となった。イタリアは自らの地に増大する人口を養うだけの穀物を見出す必要にせまられた。⁽⁴⁰⁾耕地の拡大はイタリアでは1450年以前に遡る。丘陵や山の斜面までが耕作され、放牧地は牧草地と耕地に変えられていった。あらゆる空間が耕作農業の為に要求された。16世紀には土地への投資は利益あるものとなった。土地所有形態は次第に都市市民による大土地所有に移っていった。ヴェネツィア市民が16世紀中葉か

(37) アリカントやカルタヘナでは1 reals = 54 maravedis, *ibid*, p. 524.

(38) *Ibid*, pp. 535-538

(39) M. A. Cook, *op. cit.*, p. 18.

(40) 16世紀後半ヴェネツィアでは、自国産穀物量が増大している。

M. Aymard, *op. cit.*, p. 112, 表Ⅲ参照。

表Ⅲ ヴェネツィアへの小麦移入量（単位スタイオ）

年	総移入量(T)	自国産(N)	外国産(F)	$\frac{N}{T} \times 100$
1566	585,411	182,118	403,293	31.11
67	475,380	179,338	296,042	37.73
68	354,170			
69	333,938			
70	630,580			
1571	356,663			
72	465,271			
73	500,456	264,176	236,280	52.79
74	534,964	299,036	235,928	55.90
75	455,296	320,068	135,228	70.30
1576	286,937	279,325	7,612	97.35
77	399,987			
78	489,093	285,288	203,805	58.33
79	425,995	242,649	183,346	56.97
80	419,991			
1581	411,434	308,291	103,143	74.93
82	391,732	277,581	114,151	70.86
83	553,872	216,593	337,279	39.10
84	362,277	253,734	108,543	70.04
85	332,330	204,322	128,008	61.48
1586	572,612	251,712	320,888	43.96
87	566,613	206,055	360,558	36.37
88	453,453	328,209	125,244	72.38
89	533,396	407,316	126,080	76.36
90	341,827	265,737	76,090	77.74
1591	534,161	430,857	103,304	80.66
92	557,804	305,928	251,876	54.85
93	580,394	344,110	236,284	59.29
94	410,996	311,964	99,032	75.90
95		339,120		

M. Aymard, *op. cit.*, p. 112. より作成

ら保有地を急速に増加していった過程はすでにふれた通りである。農民は没落し折半小作制の下で苦しめられるようになった。決定的転換期は16世紀後

⁽⁴¹⁾
半であった。

お わ り に

16世紀中葉までの地中海世界において、人口成長の影響はさほどきびしいものではなかった。人口増加に見合って農業生産も拡大していった。しかる後に収穫逡減の法則が働き、次第に供給困難に陥っていく。その転換期は1550年—1560年であった。

農業生産の非弾力性はこの地域の経済的困難を深めていった。北イタリアの諸都市は17世紀の初頭までなおその繁栄を維持してはいたものの危機は足元にせまっていた。1600年以後カスティーリャ、イタリアでは人口の減少が生じ、とりわけ都市人口は周辺の農村地帯での減少よりも大きかった。地中海沿岸諸国は徐々に後進農業国へと後退していくスタートを切った。この意味でいわゆる「17世紀の危機」は何よりも「地中海世界の危機」であり、その弊は既に16世紀のうちに忍び寄っていたといえる。

付表 使用した穀物単度量

スタイオ	staio	(ヴェネツィア)	83. 3	リットル
クペロ	cupello	(ラグーザ)	16	
キル	kil	(イスタンブール)	33	
ファネガ	fanega	(カスティーリャ)	55. 5	

M. Aymard, op. cit., p.172 及び F. Braudel, op. cit., p.385.

(41) イタリアにおける折半小作制の性格については、森田鉄郎「mezzadaria classica 考」『研究』(神戸大学文学会誌)19号, 1959年1—30頁, に詳しい。

(42) Trevor-Roper, “The General Crisis of Seventeenth Century”, Past and Present. No.16, 1959, pp.31-64. E. J. Hobsbawm の論文を含めて、今井宏編訳, 十七世紀危機論争, 創文社, 昭和50年, に収録。この論文をめぐって17世紀危機論争がくりひろげられたことは周知の通りである。